「序曲」に見られる詩的想像力の展開

黒　岩　忠　義

The Development of the Poetic Imagination in *The Prelude*

Tadayoshi KUROIWA

ワーヅワースの自叙伝詩「序曲」(***The Prelude***) の主題は，彼の輝かしき「幼少期の楽園喪失 (the loss of the paradise of childfood) と想像力の展開によってその喪失せる楽園を回復することにあり」[1]，まさに彼の詩的想像力の萠芽はその幼少期にあると言うことができる。ワーヅワースは1791年1月ケムブリッジを卒業すると，すぐにそこを離れる。そしてその年の五月までのロンドン滞在となる。そしてそこに彼が見たものは，華やかな都会文化の混乱と眩惑であり，悲惨と悪徳の渦巻く世界であった。そのような混乱せる世界に呼吸し乍らも，人間に対する尊敬と愛情とを自覚するに至ったのは幼少期に自然を背景にして見た人間の印象が大きく役割を演じていることは，後年になって彼がしばしば言及している所である。事実，彼は人間を故郷 Lake Districts の美しい自然によって純化された姿において幼少期の経験を語ることによって，実際，彼が後年の人間の基底をなすに至った重要な経験としている[2]。しかるに少年ワーヅワースがそこに見たものは美わしい自然の事物を通じてであり，そのような事物の助けのもとに人間を親しんだと言う点で「幸福であった」(fortunate my lot) と言うことができるだろう。

> But doubly fortunate my lot; not here
> Alone, that something of a better life
> Perhaps was round me than it is the privilege
> Of most to move in, but that first I looked
> At Man through objects that were great or fair;
> First communed with him by their help.[3]

したがって，まずワーヅワースの詩的想像力の展開をその萠芽の過程から辿るにおいて彼の輝やかしき幼少期とは著しく対照をなす「ロンドン滞在」を一考しておくことが必要であると思はれる。

ワーヅワースは「序曲」第七巻の中で，彼のロンドン滞在期を語る所によると，この都会は彼にとっては，いわゆる an earthly hell 即ち地上の地獄に過ぎない。事実，ロンドン滞在を記録した

1) Georffrey Durrant: ***William Wordsworth*** (Cambridge University Press, 1969), p. 118.
2) William Wordsworth: ***The Prelude*** (1805), VIII, 256-93.
3) ***The Prelude*** (1850), VIII, 312-17. 以下 ***The Prelude*** からの引用はすべて1850年版による。

「序曲」第七巻は都会生活が彼の内面に残した意味を十分に伝えていないと考えられているし，Herbert Read が言う様に，

> The rest is merely an inspired guide-book to the sights of eighteenth century London, with the long and irrelevant story of the Maiden of Buttermere thrown in.[1]
>
> （長い，不適切なバタミアの乙女の物語を投げ込んだ，詩才縦横の18世紀ロンドンの名所案内に過ぎない。）

即ち当時の詩人ワーヅワースの精神とは無関係の，遠くかけはなれた，切り離された，何らの現実感もない，不安定極まる何ものかであって，走馬燈のように流れるロンドンの影像と詩人の精神との間には極めて稀薄な関係以外の何ものでもない。そこにはロンドンの感覚的印象が記録され，その累積は単なるロンドンの観光案内的影響の羅列に過ぎないものである。否，むしろ詩人ワーヅワースの詩心にとっては，そこに描かれた彼のロンドンは，それは丁度北国出身の彼がホークスヘッドを去って，学都ケムブリッヂに出た時に経験したと同じく，「故郷の山の中で小学生の夢想をほしいままにして，来るべき時を基礎にして，大建築を築きあげていた，ところが今やそれが自分の目の前で急速に消散して」（'..., having in my native hills given loose/To a Schoolboy's dreaming, I had rais'd a pile/Upon the basis of the coming time,/Which now before me melted fast away,/....'）[2] 少年の夢想を，無惨にも打ちくだくものであったと言うことが出来る。

この巻はまず少年ワーヅワースがいまだ見ざるロンドンに寄せる素朴な希望と期待とをもって始まる。それはまぎれもなく，彼が一心に夢想してやまないある種の天上の歓びにも似ている。

> I then had heard
> Of your green groves, and wilderness of lamps
> Dimming the stars, and fireworks magical,
> And gorgeous ladies, under splendid domes,
> Floating in dance, or warbling high in air
> The songs of spirits!
>
> (VII, 121-6)

しかし次の節では，劇的にも急転回して，彼が実感せるがままの目前に見たこの都会に向って呼びかけて曰く，

1) Herbert Read: *Wordsworth* (Faber & Faber, 1958), pp. 65-66.
2) *The Prelude* (1805), III, 434-37.

Rise up, thou ***monstruous ant-hill*** on the plain
Of a too busy world![1]

（復活せよ，汝，余りにも繁華な世界の，平原の上の怪物のような蟻塚よ。）

即ちこの「怪物のような蟻塚」こそ，混乱と騒音の世界であり，そこではすべてのものが当惑的で，Boyle や Shakespeare, Newton の如き秩序を与える精神 (ordering mind) でさえも 'some quack doctor'[2] 即ち「ペテン師」或いは「詐欺師」の世評と同類におかれ，或いは切り離し難く複雑に混在させられてしまっている。

Thy every-day appearance, as it strikes—
With wonder heightened, or sublimed by awe—
On strangers, of all ages; the quick dance
Of colours, lights, and forms; the deafening din;
The comers and the goers face to face,
Face after face; the string of dazzling wares,
Shop after shop, with symbols, blazoned names,
And all the tradesman's honours overhead:
Here, fronts of houses, like a title-page,
With letters huge inscribed from top to toe,
Stationed above the door, like guardian saints;
There, allegoric shapes, female or male,
Or physiognomies of real men,
Land-warriors, kings, or admirals of the sea,
Boyle, Shakespeare, Newton, or the attractive head
Of ***some quack-doctor***, famous in his day.

(VII, 152-67. イタリック筆者)

要するにロンドンが彼の感覚に実際に提供するものは，混乱と不調和とが「女の物売りのかな切り声」('female vendor's scream')[3] のかん高い声に合わせて生ずる，いわば phantasmagoria の世界であり，まるで彼は「敵から逃れるように風が吹き渡る時の避難所のように静かな裏町へと突然逃げ込んで行く」('...as from an enemy, we turn/Abruptly into some sequestered nook,/Still as as a sheltered place when winds blow loud!')[4] 狂乱の場所なのである。

1) ***The Prelude*** (1850), VII, 149-50. イタリック筆者。
2) ***ibid.*** VII, 167.
3) ***ibid.*** VII, 183.
4) ***ibid.*** VII, 169-71.

A raree-show is here,
With children gathered round; another street
Presents a company of dancing dogs,
Or dromedary, with an antic pair
Of monkeys on his back; a minstrel band
Of Savoyards; or, single and alone,
An English ballad-singer. Private courts,
Gloomy as coffins, and unsightly lanes
Thrilled by some female vendor's scream, belike
The very shrillest of all London cries,
May then entangle our impatient steps;
Conducted through those labyrinths, unawares,
To privileged regions and inviolate,
Where from their airy lodges studious lawyers
Look out on waters, walks, and gardens green.
(VII, 174-88)

これはただ単にこの都会に対する彼の皮相極まる批判でもなければ，また作者個人のこの都会の生活を享受する能力がなかったことの単なる表明と見ることはできない。少くとも彼の目に写ったロンドンは無秩序であり，真の人間的な関係に欠け，のみならず残酷にして冷淡でさえある。加うるにすべてはそこでは虚偽に満ちており，模倣的である。芸術の世界とても，絵画と音楽とは「巨人と小人，道化芸人，手品師，曲芸師，おどけ役者」(——giants and dwarfs, Clowns, conjurors, posture-masters, harlequins)[1] と結びつけられている。ワーズワースが描くこの都会とその生活は，いわば劇場の単なる外面的な show のようなものに過ぎず，弁護士たち，説教師たちの騒々しい論争の場であり「みめ麗わしいひとり者」('a comely bachelor')[2] が気取りと愚鈍とを天下に表明せる場所に過ぎない。

Folly, vice,
Extravagance in gesture, mien, and dress,
And all the strife of singularity,
Lies to the ear, and lies to every sense—
(VII, 578-89)

たまたま，群衆の真中に，そこに住まう人間の条件を象徴した一人の人物——即ち彼は自分の胸に

1) *ibid.* VII, 271-2.
2) *ibid.* VII, 551.

つけた名札によってしか自己を確認できない一人の乞食——が姿をあらわす。それはとりもなおさず人間が自分をとりまくまわりの人間の無知を語る心象風景である。ロンドンのもつ愚鈍さと虚偽の真中へのこの盲目の乞食の感動的な出現は，まさにワーズワースがこれから語ろうとする効果的な言及と言うべきである。「その怪物的な蟻塚」に住まう近代人は人間の identity をまったく喪失したものと言うべきだろう。

Amid the moving pageant, I was smitten
Abruptly, with the view (a sight not rare)
Of a blind Beggar, who, with upright face,
Stood, propped against a wall, upon his chest
Wearing a written paper, to explain
His story, whence he came, and who he was.
Caught by the spectacle my mind turned round
As with the might of waters; an apt type
This label seemed of the utmost we can know,
Both of ourselves and of the universe;
And, on the shape of that unmoving man,
His steadfast face and sightless eyes, I gazed,
As if admonished from another world.

(VII, 637-49)

St. Bartholomew の市の描写に至るまでの一節の中で，このような形で示された，いわば an earthly hell のイメージは更に一層強力に展開されて行く。単に感覚を限りなく追い求め，創造的知的能力を放棄した社会を伝える詩人ワーズワースに於いては，おそらくは予言的以上のものがあることに気づかないではいられない。即ちここは本質的に我々とは無縁の人間たちの，「かすかないざないの言葉」('the feeble salutation') には誰も耳を仮さない世界である。

The feeble salutation from the voice
Of some unhappy woman, now and then
Heard as we pass, when no one looks about,
Nothing is listened to.

(VII, 665-8)

「誰も見向きすらしない」「何事も耳を傾けられることのない」この都会は，もはや「自然に対する畏敬の念」('natural piety')[1] によって結ばれることがない。それはまさに暴力と恐怖にみちた世

1) *My heart*, 9.

界である。

What say you, then,
To times, when half the city shall break out
Full of one passion, vengeance, rage, or fear?
To executions, to a street on fire,
Mobs, riots, or rejoicings?
(VII, 671-5)

ワーズワースが言う様に，ここに示された St. Bartholomew の市はまさに「巨大な都市なるものの真の要約」('true epitome/Of what the mighty City is herself—,')[1] であり，「人間のすべての創造能力」('The whole creative powers of man')[2] が眠っている世界である。「市」そのものは，A. Pope (1688—1744)の *The Dunciad* (1728—42) の最後の一節，更にすすんで，C. Dickens (1812—70) の描いたロンドンの無秩序と暗黒とを思い浮かばせるだろう。

All moveables of wonder, from all parts,
Are here—Albinos, painted Indians, Dwarfs,
The Horse of knowledge, and the learned
Pig, The Stone-eater, the man that swallows fire,
Giants, Ventriloquists, the Invisible Girl,
The Bust that speaks and moves its goggling eyes,
The Wax-work, Clock-work, all the marvellous craft
Of modern Merlins, Wild Beasts, Puppet-shows,
All out-o'-the-way, far-fetched, perverted things,
All freaks of nature, all Promethean thoughts
Of man, his dullness, madness, and their feats
All jumbled up together, to compose
A Parliament of Monsters. Tents and Booths
Meanwhile, as if the whole were one vast mill,
Are vomiting, receiving on all sides,
Men, Women, three-years Children, Babes in arms.
(VII, 706-21)

そこでは，この都会は，男，女，子供たち，腕に抱かれた赤ん坊たちを悪魔のように「吐き出す巨大な製粉工場」('one vast mill〔are〕vomitting')[3] であり，全く「野蛮で地獄的」('Barbarian

1) *The Prelude* (1850), VII, 722-24.
2) *ibid.* VII, 681.
3) *ibid*, VII, 719-20.

and infernal')[1] なこの世界に住んでいる人々の生命は，彼らの完全な破壊をおびやかす文明の歯車につかまっている。

したがってこの都会は，それが単に本質的に混沌として，機械的な，かつ非情であるだけでなく，詩人ワーズワースが自己の想像力をそれによって，たえず脅やかされ，混乱させられていることに気づいている。それゆえに一層 'infernal'（地獄的）なのである。詩人ワーズワースが Wye 河の谷間にこもる複雑性（complexities）にその魂をいこうたあの「秩序と関係」（'order and relation)[2] を我々はそこに期待することは困難であるように思はれる。

Oh, blank confusion! true epitome
Of what the mighty City is herself
To thousands upon thousands of her sons,
Living amid the same perpetual whirl
Of trivial objects, melted and reduced
To one identity, by differences
That have no law, no meaning, and no end—
Oppression, under which even highest minds
Must labour, whence the strongest are not free.
(VII, 727-30)

最とも強力な精神でさえもかような状態の混乱の中に法則と意味とを認めることは困難であると思われるが，ワーズワースはそのような混乱と無秩序の中にさえも，ある程度の想像力の秩序を与えることには必ずしも全面的に絶望しているわけではないが，要するにこの巻に見られるロンドンは「安静と調和」('Composure and ennobling Harmony')[3] とを暗示してはくれない。

一方，第八巻においてはワーズワースはこのようなロンドンの地獄から転じて，ロンドンと彼の故郷の人々の生活とを対照して見せる。彼が語るところでは，そこの人々は農業を営み，単純な自然との交渉の中に生活を営んでいる。彼の言及する「田舎の市」('a rustic fair')[4] は，わづかに「見知らぬものが，あちこちに散在していて」いわば，それは彼らの「祭り」であり（'And here and there a stranger interspersed./They hold a rustic fair—a festival.')[5] そこには「陽気と快活」('gaiety and cheerfulness')[6] とが横溢している。この話は彼の故郷への旅行者のための案内ではなく，人間の生活は本来どうあるべきかを語る心象として役立つように意図されてい

1) *ibid.* VII, 687.
2) *ibid.* VII, 761.
3) *ibid.* VII, 771.
4) *ibid.* VIII, 11.
5) *ibid.* VIII, 10-11.
6) *ibid.* VIII, 53.

る。それは「田園の平和」('rural peace')[1] な世界であり「幾万本もの木々が植えられたあの有名な楽園，或いは Gehol の比類なき庭園よりも絶妙に美しい地域」('tract more exquisitely fair/Than that famed paradise of ten thousand trees,/Or Gehol's matchless gardens,)[2] なのである。この真の楽園は人間が望みさえすれば居住できる世界であり，空想的なすべての魅惑せる庭園よりは歓楽の点で勝る世界である。楽しい「歓楽の家」('domes/Of pleasure')[3] の有名な庭園を喚起した後，曰く，

But lovelier far than this, the paradise
Where I was reared;

(VIII, 98-9)

(しかし乍ら，これよりもはるかに美しかったのだ，私が育ったその楽園は。)

そのような彼にとって，理想的とも思はれる自然との調和の中に生活を営む人々の間にも哀しみや人間的苦悩がないわけではない。しかし乍ら，彼らの哀しみや人間的苦悩を語ることは，彼にとっては当面の問題ではない。彼の詩的想像力が自然との調和と平穏な渓間に住まう人々のゆがめられざる生活によって養われたことを彼は幸福に思う。第八巻はワーヅワースが自分の歩いて来た道を辿り，そして如何ようにして人間への関心が自然のより純粋な形象への幼少期の愛にとって代ったかを語る回想をなしているが，今や問題はロンドンの生活によってその期待をくじかれた彼が，人々が地上の楽園を創造せんとして，政治的行為によって求めたあのフランス革命への挑戦に直面するが故に重要である。

彼のフランス滞在を語る話はワーヅワースが行動の世界とはじめて対決したことを示してくれる。彼は革命の理念にひかれるが，その裏切りに絶望する。中でも最悪なことは，彼があれ程，人類救済の道であると熱烈に期待を寄せたフランス革命に対する祖国イギリスの不義に直面したければならないことであった。Annette Vallon との恋愛事件は，失敗と狂気との悪夢の物語として間接的に伝えられる。

Into a deep wood
He fled, to shun the haunts of human kind;
There dwelt, weakened in spirit more and more;
Nor could the voice of Freedom, which through France
Full speedily resounded, public hope,
Or personal memory of his own worst wrongs,
Rouse him; but, hidden in those gloomy shades,

1) *ibid.* VII, 73.
2) *ibid.* VIII, 75-7.
3) *ibid.* VIII, 84-5.

His days he wasted,—an imbecile mind.

(XI, 578-81)

このことは勿論，詩人ワーズワースを直接に語るものではないにしても，少くとも第九巻と第十巻の全体を占める苛酷な，知的，倫理的危機を暗示してくれる。行動の世界と思考の世界でさえも彼を裏切ったと思われる。

This was the crisis of that strong disease,
This the soul's last and lowest ebb; I drooped,
Deeming our blessed reason of least use
Where wanted most.

(XI, 306-9)

この危機から彼を救ったものは，ワーズワースが語るように，妹の Dorothy の力であった[1]。

行動の世界とワーズワース自身のそれに於ける失敗とは，しかし乍ら，彼がその世界から自己を解放してくれる詩業と言う救済の道を探し求めねばならなかったことを意味する。伝えられるところでは，この課題が何であるかについては，この巻の終りの部分を待たねばならない。そこに見られるものは，彼がフランス革命に求めた地上の楽園への希望に決別して，やがて彼はそれに代って，それとは異った理念，即ち，人間精神の「偉大なる社会」('one great society')[2] の達成へと向わねばならない。

There is
One great society alone on earth:
The noble Living and the noble Dead.

(XI, 394-6)

ワーズワースがこれまでに辿った挫折と失敗の，それ故に貴重な過去の精神は「健康とよろこび，そして完全な充足への道を再び登る」('reascend/To health and joy and pure contentedness;')[3] 階段とならねばならない。真の楽園とは心の中にあり，精神が観察するものを変容する精神の力の中にあることを今や彼は悟らねばならない。

人間の条件が改善さるべきものならば，人間の心そのものは，よろこびによって養はれねばならない。即ち彼の世界は彼自身の想像力によって変容されねばならない。そこでワーズワースは人間

1) *ibid.* XI, 364-8.
2) *ibid.* XI, 394.
3) *ibid.* XI, 397-8.

の心に放射されたままの自然の世界へと回帰して行かねばならない。

The morning shines,
Nor heedeth Man's perverseness; Spring returns,—
I saw the Spring return, and could rejoice,
In common with the children of her love,
Piping on boughs, or sporting on fresh fields,
Or boldly seeking pleasure nearer heaven
On wings that navigate cerulean skies.
(XII, 31-7)

したがって，もし人間の歓びの源が人間の心の中にあるのであれば，今やワーズワースの課題は想像力を，それが閉じ込められた習慣の鎖から解放することでなければならない。この課題に対してはワーズワースは既に幼少期に故郷の美しい自然との親密な交渉の中に準備されていたと言うべきであろう。

I had known
Too forcibly, *too early in my life*,
Visitings of imaginative power
For this to last: I shook the habit off
Entirely and for ever, and again
In Nature's presence stood, as now I stand,
A sensitive being, a creative soul.
(XII, 201-7. イタリック筆者)

「序曲」(***The Prelude***) の第一巻は，少年ワーズワースが生れたスコットランドとの境カムバランドのコッカマウスを貫流するダーウエント川の美しい調べと5才の少年ワーズワースがまるで「裸の蛮人」同様の姿で楽しく水とたわむれる寸描で始っている。わづか三十行足らずであるが，これから詩人ワーズワースが語らんとする全十三巻に及ぶ膨大な長篇の詩的想像力の展開を語る導入部となっている。それは彼の少年時代の光輝と自由気ままな生活の輝やかしき黄金時代 (the golden age) として描かれた，いわば幼少期の楽園状態とも言えるもので，この導入部に示される限りに於ける詳細な事象は一般に少年期の誰にでも経験されるような平凡な事柄に過ぎないもののように思はれるが，少年ワーズワースにあっては，彼が安らぎを感じる自然の世界，光輝と黄金の光を浴びた自然の中で，太陽と水の洗礼をうけた描写で示されている。この世界は「黄色いノボロギク」('yellow-ragwort')[1] でさえも「花の咲き乱れる森林」('flowerly grover')[2] を形づく

1) *ibid.* I, 294.
2) *ibid.* I, 293.

り，まるで原始人のように裸の少年は，何事も恐れることなく雷雨に打たれ乍ら，つっ立った姿で示される。

Oh, many a time have I, a five years' child,
In a small mill-race severed from his stream,
Made one long bathing of a summer's day;
Basked in the sun, and plunged and basked again
Alternate, all a summer's day, or scoured
The sandy fields, leaping through flowery groves
Of yellow ragworn; or when rock and hill,
The woods, and distant Skiddaw's lofty height,
Were bronzed with deepest radiance, stood alone
Beneath the sky, as if I had been born
On Indian plains, and from my mother's hut
Had run abroad in wantonness, to sport
A naked savage, in the thunder shower.
(I, 288-300)

果してこの無垢の歓喜の状態は一体如何様にして喪失され，そして如何様にして詩的想像力の力によって，その大部分が回復されるに至ったのであろうか。殊に彼の詩的想像力の萌芽はどのような形で胚胎し，それがしかも，極めてワーヅワース的展開の仕方でどのような発展を見るに至ったのであろうかか。さらに詳細にみてみたい。

第一巻の導入部は直ちに幼年時代，学校時代（Hawkshead の Grammarschool 時代）へと進み乍ら，5才児から10才の少年ワーヅワースが語られる。このような輝やかしい自然の世界に移植された少年の魂は次第に深く根をそこに下しはじめ，「不調和な要素」（'discordant elements'）[1] の仲立ちをする「はかり知れざる精神の作用」（'inscrutable workmanship'）[2] の影響下に成長しはじめる。

Fair seed-time had my soul, and I grew up
Fostered alike by beauty and by fear:
(I, 301-2)

美と恐怖とがワーヅワースの少年時代を支配し，歓喜と罪の意識（'joy and guilt'）とが混在するようになる。例えば鳥の罠をかける時も，又少年が他人の罠にかかった獲物を奪う時も少年ワーヅ

1) *ibid.* I, 343.
2) *ibid.* I, 342.

ワースは歓喜と恐怖（'exultatiton and terror'）とを同時に体験せずにはいられない。曰く，

and when the deed was done
I heard among the solitary hills
Low breathings coming after me, and sounds
Of undistinguishable motion, steps
Almost as silent as the turf they trod.
(I, 321-5)

この「はかり知れざる精神の作用」は次第に感情と知覚の模様をあやなし乍ら，しきりに人間の魂を形成して行く。もはや幼児の無垢な大胆さと歓喜とはそこには見ることはできない。例えば，そのプロセスは少年ワーヅワースが，ある湖の岸に見つけた他人のボートを無断で沖に漕ぎ出した時の「盗みの行為」（'an act of stealth'）[1] を語る描写の中に更に躍如たる描写で示される。少年ワーヅワースは岸から舟を沖へと漕ぎ出して行くにつれて，彼は次第に空想の世界へと変容されて行く。

She was an elfin pinnace; lustily
I dipped my oars into the silent lake,
And, as I rose upon the stroke, my boat
Went heaving through the water like a swan;
(I, 373-6)

ここでは少年ワーヅワースがそのボートを「妖精の小舟」に変容させることによって現実の躍如たる描写と見事に結合させている。即ち櫓を漕ぐ肉体的な行為はリズムを伴い，少年の漕ぐボートを白鳥に喩えた詩的比喩は，まさに白鳥が泳ぐそのさまに似て，水を切って，一連の力強いストロークで湖上を前へと進ませることによって，普通ならざる真実性を与へられていると言うべきである。このような二つの経験の様式——即ち事実と空想のそれ——は少年がオールを漕ぐに合はせて山の頂が彼の頭上高く聳えるのを見るにつれて，少年ワーヅワースの内面では，彼の盗みに対する罪の意識がはっきりと自覚されることによって修正される。

When, from behind that craggy steep till then
The horizon's bound, a huge peak, black and huge,
As if with voluntary power instinct
Upreared its head.
(I, 377-80)

1) *ibid.* I, 361.

これは極めて自然的な出来事である。最とも高い山の頂は近くの山に隠くされていて，少年がボートを岸からこぎ出した時にはじめて姿をあらわす。然しこの時，偶々，より遠くの山々が意図的とも思われる幻影によって次第に高くなってゆく。今や罪の意識を確実に自覚するに至った少年ワーズワースにとってはその峯はますます頭をもたげて行くように思はれる。やがて，山そのものが少年のあとを追いかけてゆく。ここで詩人ワーズワースが意味するものは少年が自己の犯した罪を自己の環境に投映させ，少年時代固有の詩的行為によって，自己の環境に人間的もしくは超人間的な生命を賦与していると言うことである。この一節のもつ興味は心理学的よりはむしろ詩的意識の萌芽が見られる点にあると言うべきである。そこで少年の恐怖はますます増大してゆく。

I struck and struck again,
And growing still in stature the grim shape
Towered up between me and the stars, and still,
For so it seemed, with purpose of its own
And measured motion like a living thing,
Strode after me.

(I, 380-5)

このような経験は少年の心に昼となく夜となくいつまでも，とどまり，世界を彼のために変容し，彼の夢となってつきまとうようになる。そこにワーズワースが暗示するものは詩的想像力が形成されるのは，実にこのような経験からであると言うことである。曰く，「宇宙に宿る知慧と霊」('Wisdom and Spirit of the Universe')[1] とが「我々人間の魂を形成する情熱」('passions that build up our human soul')[2] を彼のために織りなしたと言うのであ。しかも彼にとっては，それは「極めて有益」('not in vain') になされたと言うべきである。まさに「宇宙の霊」が彼の魂を形成したが故に彼は詩人となり得たと言うべきである。

Not with the mean and vulgar works of man,
But with high objects, with enduring things—
With life and nature, purifying thus
The elements of feeling and of thought,
And sanctifying, by such discipline,
Both pain and fear, until we recognise
A grandeur in the beatings of the heart.
Nor was this fellowship vouchsafed to me
With stinted kindness.

(I, 408-16)

1) *ibid.* I, 401.
2) *ibid.* I, 407.

換言するならば，ワーヅワースが「幸福であった」のは，彼の感情が少年時代から「高尚な物象」('high objects')[1]——即ち恒久的に普遍で関心ある山々，湖，小川の如き物象と少年時代から親密にかかわって来たと言うことである。したがってワーヅワースの詩的想像力は人々の凡庸な仕事の一時的にすぎない煩わしさから解放された，まさにそれ故に常時に思惟されうる自然の言語を与えられていると言うことである。宇宙構造そのものと少年ワーヅワースとのかかわりは自分自らの人間性のもつ壮大さ('grandeur')[2]への深い信頼を彼に与えることになる。このようにして，彼に於いては人間自身のもつ価値への信頼が確立されてゆく。

次はスクールメイトに加わってスケートに興ずる描写が続く。それは氷の上を一団となって追いつ追われつする時の，たのしげな騒音の躍如たる物語である。

We hissed along the polished ice in games
Confederate, imitative of the chase
And wooland pleasures, —the resounding horn,
The pack loud chiming, and the hunted hare.
So through the darkness and the cold we flew,
And not a voice was idle; with the din
Smitten, the precipices rang aloud;
The leafless trees and every icy crag
Tinkled like iron;

(I, 434-42)

木々や岩々からはね返ってくる鋭いこだまは凍結した氷の，いわば鉄床の上を打つハンマーの音である。そこに見られるものは自然に対する技巧的描写以上のものがあるように思われる。人間の声の騒々しい混乱と，その騒音をはね返す強固な氷がさける音の硬さとの間には著しい対比が確立されていて，遊びに興じる少年達は自分達とは究極的には異質の，しかも彼らを超越した自然の法則に従っていることを暗示するものである。少年たち自身は彼らの遊びの中でさえも周囲の環境がかもし出す「物淋しさ」に気づいていないわけではない。

While far distant hills
Into the tumult sent an alien sound
Of melancholy not unnoticed, while the stars
Eastward were sparkling clear, and in the west
The orange sky of evening died away.

(I, 442-6)

1) *ibid.* I, 409.
2) *ibid.* I, 414.

詩人となるべき運命にある少年ワーヅワースは，やがて彼の仲間たちをはなれ，氷上に姿をうつした影——これはまことに象徴的な活動なのだが——即ち一つは，彼が目がくらむことによって，他は幻影によって惹起された一つの運動とも言うべき周囲の崖の旋回を逃める。ここに於いてもまた若き詩人ワーヅワースは彼の課題を追い求めていると見るべきである。即ちそこにおける彼の瞑想は混乱の中にも一つの教訓の出現を導き，すべての生は終局において，究極の静寂（an ultimate tranquility）であることを認識するに至る。ワーヅワースにとって平衡と遠近法の感覚とは重要な意味をもつものであるが，このことを彼はすでに幼少期にえていたことを示すものと言うべきであろう。

第二巻でも，少年時代の話が続く。時には Milton ばりの高雅な文体の模倣と 18 世紀風の粗雑な無韻詩とが一見平凡に思えて実は平凡でない主題を論ずる手段となっているが，彼は見事に自分本来の文体にかえり，次のように美しい表現で少年時代の世界を創造するのに見事に成功している。

But, ere night-fall,
When in our pinnace we returned at leisure
Over the shadowy lake, and to the beach
Of some small island steered our course with one,
The Minstrel of the Troop, and left him there,
And rowed off gently, while he blew his flute
Alone upon the rock—oh, then, the calm
And dead still water lay upon my mind
Even with a weight of pleasure, and the sky,
Never before so beautiful, sank down
Into my heart, and held me like a dream!
(II, 164-74)

これはワーヅワースの精神が極めて日常的な行為をロマンスの世界へと変容する用意がある時は何時でも少年時代の世界を再生して見せることを意味するものである。少年たちはボート仲間たちが未知の島を発見することで小さなオデセイとなり，岩の上に笛を吹きながらうしろに一人とり残された少年ワーヅワースは放浪する冒険者たちの吟遊詩人となりすまし，彼の吹く楽の音は誰にも妨害されない空と水の静寂の賛歌である。しかし乍ら彼は自分の本来のテーマを見失うことはしない。あくまで出来事は一詩人にとっては，

Thus were my sympathies enlarged, and thus
Daily the common range of visible things
Grew dear to me:

(II, 175-7)

（こうして自然と私との交歓はひろがり，そして日一日と，ふだん見慣れた事物もこうして次第に私には親密なものなって来たのだ。）

ワーヅワースは今まで語って来った物語を突然さえぎって，彼の想像力が人間生活の中でどのような位置を占めるかを，母の懐に抱かれた幼児のイメージで示して見せる。母の懐にいだかれた幼児は人間の魂の純白さを示す原始のイメージであるが，地上の生活と言う側から見れば魂は眠っている。詩人ワーヅワースはこの魂がどう成長するかと言うことから始める。幼児は母の見守る愛の眼差しの中に母のもつすべての属性を知り，乳房をまさぐる手を通して母の愛の全体を知る。このようにして動きはじめた幼児の魂は，自分の感覚によってとらえた対象の一面からしてその対象の全体を自ら察して行く。これが母子相互にかわされる愛の結びつきである。幼児は成長するにつれてこの愛の結びつきを地上のあらゆるものに拡大することによって，地上の生活をはじめる。いわば母の懐にいだかれた人間になる。そこで人間は幼児が母の眼差しから察知したように，自然からうける一つの体験をきっかけにして自然の全体を察知する。こういった人間と自然とがつくる世界はワーヅワースが言うように「動的な宇宙」であろう。またこの「動的宇宙」に身をおくことによって一を受けて全てを知ると言うことである。即ち母から一本の花の美も，また他人のよろこびにも，苦痛にも応ずることを知る。「自然にそなわる畏敬の念」（'natural piety'）によって知覚する精神（'perceiving mind'）を得，次は価値ある世界の創造に参加することを知るに至ると言うのである。これがワーヅワースの詩精神の基本的条件である。このような詩精神が成人してゆく人間の現実生活の煩わしさによって去勢され，圧殺されてゆくことは詩人自ら知っているところであるが，又同時にそういった否定的な圧力にもめげず，最後の息をひきとるまで，これを持続する人間のいることも疑わない。これが詩人であると言う確信である。ワーヅワースの場合，幼児の精神に上述の如き「包括力」[1] があると言う考へ方は，彼においては何ら矛盾するものではなく，創造する（create）ものと受動する（receive）ものとが同一物であると言うことである。このように幼児に「包括」する能力があると言うことは，それは先天的なもので，プラトン思想が根底にあるとされている。こう言う考え方は勿論，当時の18世紀の思想的傾向，つまり John Locke (1932—1704) に代表される経験主義思想に背を傾けたものであることは明白である。

すべての人間はある程度までは，五感の世界に想像力の歓びをもって応ずることによって能動的な宇宙の中に活動的に生きることができよう。

Emphatically such a Being lives,
Frail creature as he is, helpless as frail,
An inmate of this active universe.

1) Cf., *The Prelude* (1805), II, 246-50.

For feeling has to him imparted power
That through the growing faculties of sense
Doth like an agent of the one great Mind
Create, *creator* and *receiver* both,
Working but in alliance with the works
Which it beholds.

(II, 252-60. イタリック筆者)

したがって，この意味において，すべての人間は詩人であり，創造的能力を発展せしめたその程度に応じてのみ，充全的に生き，かつ人間的であると言うことができる。

Such, verily, is the first
Poetic spirit of our human life,
By uniform control of after years,
In most, abated or suppressed; in some,
Through every change of growth and of decay,
Pre-eminent till death.

(II, 260-4)

なお，その終りの部分にあってワーヅワースは知的愛 ('intellectual love') が想像力にとって必要であって，各人は己れの意識を十分に発展せしめる仕事を自らに課してきたことを説明してくれる。

'tis thine,
The prime and vital principle is thine
In the recesses of thy nature, far
From any reach of outward fellowship,
Else is not thine at all.

(XIV, 214-18)

想像力は幼少期に社会と自然とによってはぐくまれ，その成長を支えかつ，それを鈍らせる力をもつ生活習慣からそれを守る仕事は各人だけに属するものであるが，詩と言うものは単に自発的なものでもなければ，また詩人だけがもつ特別の問題にのみ関心があるわけでもなく，殊にワーヅワースにとって詩人とは，「人間に語りかける人間」('a man speaking to man') であり，その意味で全ての人間は想像力の点では詩人に類似していると言うことができる。ただ詩人は常に世の人々の先頭に立ち，人々に道を示す。詩心が若きワーヅワースにおいて10才までに如何ようにして啓発されたか，また如何ようにして彼の生活に生命と価値を賦与したかは，もう少し見てみなければならない。

I felt the sentiment of Being spread
O'er all that moves and all that seemeth still;
O'er all that, lost beyond the reach of thought
And human knowledge, to the human eye
Invisible, yet liveth to the heart;
O'er all that leaps and runs, and shouts and sings,
Or beats the gladsome air; o'er all that glides
Beneath the wave, yea, in the wave itself,
And mighty depth of waters.

(II, 401-9)

即ち，ここに言われる「存在の感情」とは,「受動的な魂には，いかなる血縁関係も存在しない対象の中に類縁関係を観察すること」('observation of affinities in objects/where no brotherhood exists To passive minds.')[1] により到達された知的結果（'intellectual effects'）であるとも言うことができる。このような洞察はワーヅワースが言うように精神の中に深く根ざした習慣となり，次第に感情の中にまで浸透して，その結果詩人は世界を万物の複雑な相互の働きの結びつき，それらの生命に満ちた有機体 (unity) の歓喜にあふれた感覚でもってこの世界を体験する。これは感傷的感動ではなく，力にあふれた知性によって生まれた歓喜とも言える。ワーヅワースを山や湖の大自然の世界に素朴な感情の満足を求めているにすぎないと解するのは根本的に誤りである。上述の有機体論はとりもなおさず，意識的苦痛からの逃難として考えたヴィクトリア朝期の自然観よりは，むしろ「世界を大きな組織」('the great system of the world')[2] として見るニュートンの自然礼讃に近いと言はねばならない。人間，動物，鳥，魚をそれぞれ陸地に，空に，水の下に統合するものは，例えば，跳び，走り，叫び，飛翔し，又泳ぐが如き，動としての具体化された生命の力である。叫び，歌うことは，動の様式であり，音はエネルギーであり，生命は多くの，異ってはいるが，相互に関連したリズムの中に示された動の様式である。人間が世界について，知るものはすべてこの世界の驚異と秘義について，感覚を呼びおこし，生命の広大な様式は人間をして視野の彼方にまで広がっていることを信じさせてくれるに十分である。ワーヅワースはこの点において自然科学者に近い。詩心を生かしめるよう人々に求める時，ワーヅワースは人々にその知性と感情の全能力いっぱいに生きることを求めているのである。幼少期の自然との親密な，美しい交歓の中にかくの如き詩的想像力の萌芽と展開をえていたと言うべきである。

1) *ibid.* II, 389-6.
2) Cf., G. Durrant: *Wordsworth and the Great System* (Cambridge, 1970)

Select bibliography

Durrant, Geoffrey. *Wordsworth and the Great System*, Cambridge University Press, 1970.

Durrant, Geoffrey. *William Wordsworth*, Cambridge University Press, 1969.

Hamilton, Carson C. *Wordsworth's Decline in Poetio Power*, Exposition Press, 1963.

Hefferman, James A. W. *Wordsworth's Theory of Poetry*, Cornell University Press, 1969.

Heven, R. D. *The Mind of a Poet*, New York, 1967.

Lacey, Norman, M. A. *Wordsworth's View of Nature*, Conneticut, 1965.

Legouis, E. *William Wordsworth and Annette Vallon*, Conneticut, 1967.

Legouis, E. *The Early Life of William Wordsworth*, Russel & Russel, 1965.

Lindenberger, Herbert. *On Wordsworth's Prelude*, Princeton University Press, 1963.

Moorman, Mary. *William Wordsworth*, 2 Vols, Oxford University Press, 1957.

Wooding, Carl. *Politics in English Romantic Poetry*, Harvard University Press, 1970.

Wordsworth, Christpher. *Memoirs of William Wordsworth*, 2 Vols, Boston, 1966.

Wordsworth, Dorothy. *Journals*, 2 Vols, ed. E. de Selincourt, Macmillan, 1959.

Wordsworth, William and Dorothy. *Letters*, 3 Vols, ed. E. de Selincourt, 2nd ed., revised by Mary Moorman and Alan G. Hill. Oxford, 1970.

Wordsworth, William. *The Prelude*, ed. E. de Selincourt, 2nd ed., revised by Helen Darbishire. Oxford, 1965.

Wordsworth, William. *Poetical Works*, 5 Vols, ed. E. de Selincourt and H. Darbishire. Oxford, 1967.